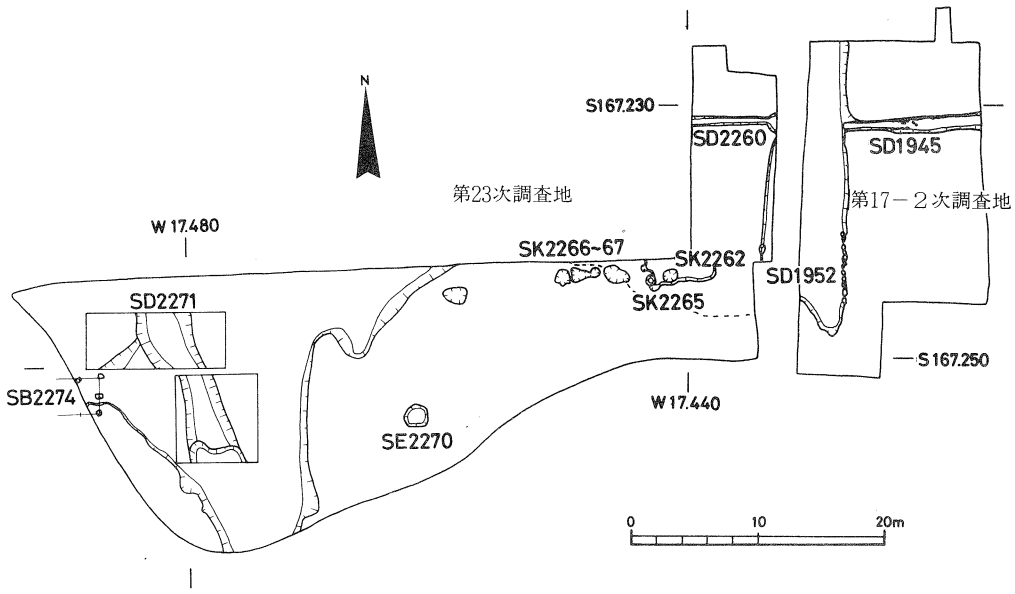
藤原宮第23次・日高山瓦窯の調査

（昭和53年７月～昭和53年９月）

藤原宮第23次調査　この調査は橿原市市営住宅建設に伴って実施したものである。調査地は藤原京右京七条一坊一・二坪の想定位置にあたり，条坊街区や日高山瓦窯に関連する遺構の存在が予想されたため，日高山丘陵裾に沿い東西60ｍの不整形な発掘区を設けた。藤原宮期の遺構面は，わずかに西北に傾斜するもののほぼ平坦であり，発掘区中央東寄りでは岩盤地山面，その東西両側では整地土上面で遺構を認めた。検出した主たる遺構には，掘立柱建物１，井戸１，朱雀大路西側溝および整地土下の古溝を含む溝３，土坑数基などがある。

ＳＢ2274は，南北２間以上，東西１間以上の掘立柱建物。柱間1.6ｍ・柱穴方0.5ｍで丘陵裾部に近接する小規模な建物である。井戸ＳＥ2270は，径1.8ｍ，深1.1ｍの掘形をもち，井戸枠の遺存はない。井戸埋土は３層に分れ，上層からは木簡をはじめとする木質遺物が，中・下層からは土器が多く出土した。



藤原宮第23次調査遺構配置図（１：600）

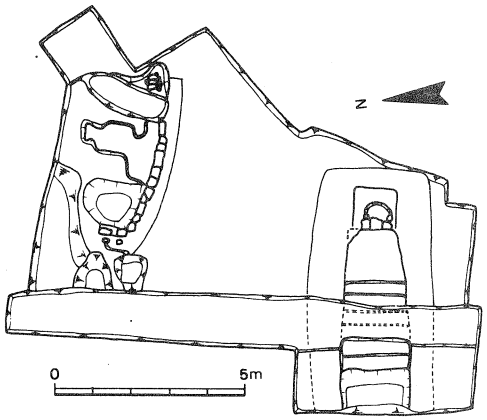
朱雀大路西側溝ＳＤ1952は昭和51年の調査で東岸を明らかにしているが，今回その西岸を検出した。溝肩部には部分的ながら径40㎝大の石材が遺存し，溝幅5.0ｍを知ることができた。溝ＳＤ2260は，幅0.8ｍ，深0.3ｍの素掘りの東西溝であり，朱雀大路路面上を横断する溝ＳＤ1945の西延長上にあたる。下層溝ＳＤ2271は，発掘区西半の整地土層下に検出した幅3.9ｍ，深0.6ｍの流路であり，丘陵谷間から山裾に沿い西北流する。溝内からは布留式土器が出土した。ＳＫ2266・2267は発掘区東端に集中する土坑群で，いずれも藤原宮期の土器少量を包含していた。ＳＸ2265は柱痕跡をとどめる柱穴であるが，関連の柱穴は検出できなかった。

出土遺物には，木簡・瓦・木製品・土製品などがある。これらは主として整地土層から出土し，遺構に伴うものは少い。井戸ＳＥ2270からは「□首首」の木簡や土師器甕を主とする土器，斗雛型・曲物・横櫛・削掛けなどの木製品，窯壁片が出土した。このうち斗雛型は巻斗を模す未製品で，一辺4.9㎝・高さ4㎝をはかる。多数を占める整地土出土の遺物のうち，家・鶏の形象埴輪や多量の円筒埴輪の存在が注目される。これらは藤原京造営に伴う整地削平作業によって散乱したものと考えられ，日高山丘陵上に古墳が存在していたことをうかがわせる。また発掘区西半の整地土には多数の瓦類が含まれていた。これらは胎土・焼成・調整手法など日高山瓦窯所産の特徴を示す。この他，整地土からは，硯・土馬・溶笵・横櫛が出土した。溶笵は湯口部を留める破片である。

最後に調査の結果明らかにできた点をまとめておこう。①調査地は日高山とその東に延びる丘陵の谷間にあたり，弥生時代以降しだいに埋りつつあった谷筋を，藤原宮造営に伴って埋めたて整地したものであり，その時期は日高山瓦窯操業以後，朱雀大路造作に並行する頃である。②藤原京七条一坊二坪の想定位置は，大半を日高山丘陵が占め，藤原宮期の大規模な建物が存在した可能性は少い。③藤原宮第19次調査で検出した七条条間小路は，今回の調査では認められず，坊内が小路によって区分されていない可能性を残す。

日高山瓦窯の調査　この調査は，日高山公園の斜面改修工事に伴って実施した。調査地は昭和35年調査の瓦窯に隣接する丘陵西斜面で，調査に先だつ磁気

探査の結果を参考に約100㎡の発掘区を設けた。調査の結果，並列する瓦窯2基を検出し，南から1・2号窯とした。なお昭和35年調査の瓦窯は探査の成果から4号窯と呼ぶ。

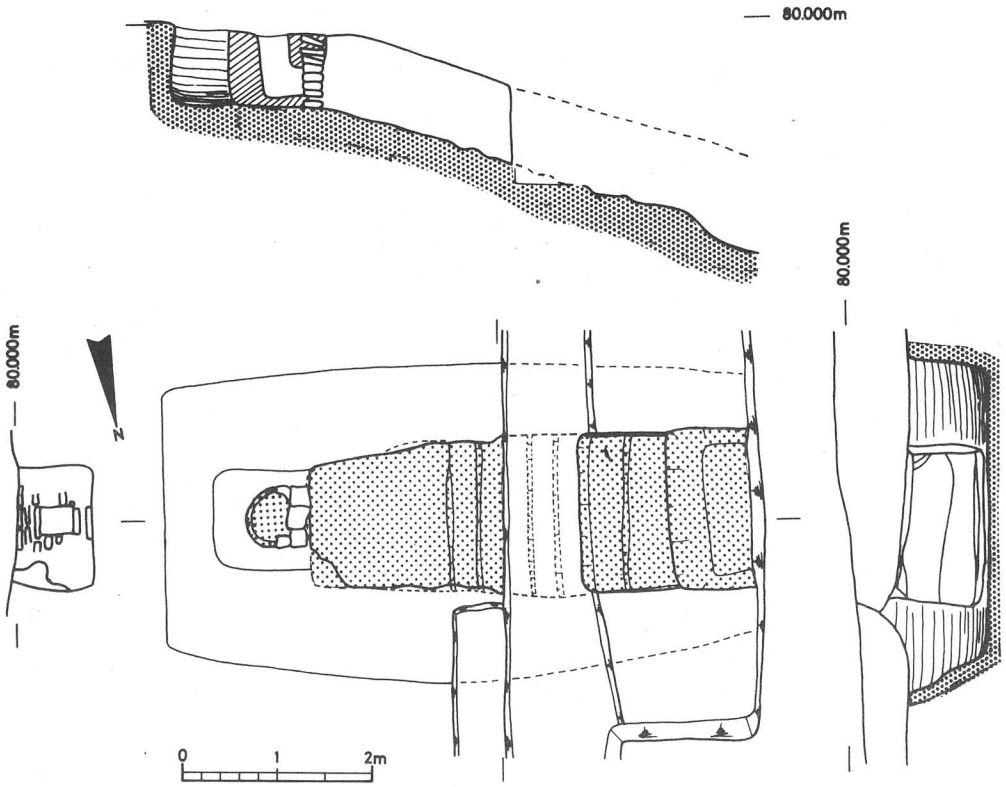


日高山瓦窯遺構配置図（1：200）

1号窯は，花崗岩地山層内に基底をおく全長4.5m以上の登窯であり，その窯体は後述するように独特の方法によって構築されていた。焼成部は長さ3.8m，最大幅1.6mの規模で，奥壁中央に1口の煙出しをもつ。床面には地山を削出した階段6段があり，床面傾斜17度前後をはかる。燃焼部はすでに大半を失っていて，わずかに長さ0.5mを検出したにすぎない。燃焼部床面は，焼成部最下段よりさらに0.35m低く，1.5mの幅が知られた。

1号窯の構築は，地山層を平面長方形に掘込むことから始まる。この掘形は全長6.2m以上，最大幅3.6m，深さ0.9m前後で，窯体に比して著しく幅が広い。ついでこの掘形の内側に粘土を版築状に幅約1m積み上げ，窯体の輪郭を形作る。そしてこの輪郭の内壁に粘土（厚10～15㎝）を塗り窯体を仕上げている。煙道部は大きく輪郭を作ったのち，多量の粘土を用いて作るが，奥壁との取付き部にのみ日乾レンガを使用する。天井部は奥壁近くに一部をとどめていたが，スサを混えた粘土（厚30㎝）を認めたのみで構造の詳細はわからない。上述したような窯体の構築方法は，崩壊しやすい花崗岩のばい爛地山層に窯を作る際の一つの工夫とも解されるが，詳細は不明である。焼成部には上下2つの堆積層があった。下層は厚さ約20㎝の灰層であり，上層には7世紀後半の土器や8世紀代の土馬，11～12世紀の瓦器などが混在していた。

2号窯は，1号窯の北7mにある全長4.7mの平窯であり，窯体北半はすでに失われていた。構造および平面形は，昭和35年調査の4号窯と類似する。すなわち，花崗岩地山層を掘込んだのち，日乾レンガを平積みして構築する平窯で，窯壁は日乾レンガ面にスサ混り粘土を塗り仕上げている。日乾レンガ7段



日高山１号瓦窯実測図（1：80）

分，高さ60㎝をとどめ，掘形内壁との間には裏込めに用いた粘土が認められた。窯体の平面は杓子形をなし，焼成部最大幅 2.5 ｍが知られる。煙出しは，１口を確認したにすぎないが，南端に偏するところから本来は４号窯と同様３口設けられたものであろう。燃焼部はすでに破壊をうけていたが，日乾レンガ３段分を残す焚口部を検出することができた。２号窯からは，軒丸瓦6274 A・軒平瓦6647 C各１点と熨斗瓦６点および多量の丸平瓦が出土した。このうち6647 Cは胎土や調整手法が日高山瓦窯所産瓦と異なり，疑問を残している。

今回検出した１号窯は，登窯であるものの構築方法が特異であり，また奥壁部が角張るなど通有の登窯とは異なっている。むしろ，奥壁から直角に立ちあがる煙出しの構造は，平窯である２・４号窯と共通するから，ともに藤原宮造営に際し構築操業された瓦窯とみなせるのである。（なお上記２つの調査成果については，『藤原京右京七条一坊調査概報』1978年９月を参照されたい）。